

「仕事を知ること」と「ものを知ること」

—アリの人々の教育観に関する—考察—

鈴木 郁乃

はじめに

エチオピア政府は、他のアフリカ諸国の政府と同様に、教育を国の発展を促すものとして重要視し、近年教育制度改革を実施し、学校教育の普及と効率化を目指している。エチオピア政府のこうした姿勢にも現れているが、アフリカにおいて「教育」が語られる場合、学校教育に限定されて用いられることが少なくない。しかし教育とは学校に独占されるものではない。本稿では、教育という言葉を在来知識や技術の伝承なども含めた、子どもの社会化過程の全般を指す言葉として捉え直し、エチオピア西南部に暮らすアリの人々の教育観について考えてみたい。

子ども達の共同労働組織モラ

南部諸民族州南オモ県の県都ジンカから徒歩6時間ほど離れた、標高約2000メートルの地域にドルドラ村は位置する。村の人口は3818人（1993年センサス）で、そのほとんどはアリ語を母語とするアリ人が占める。

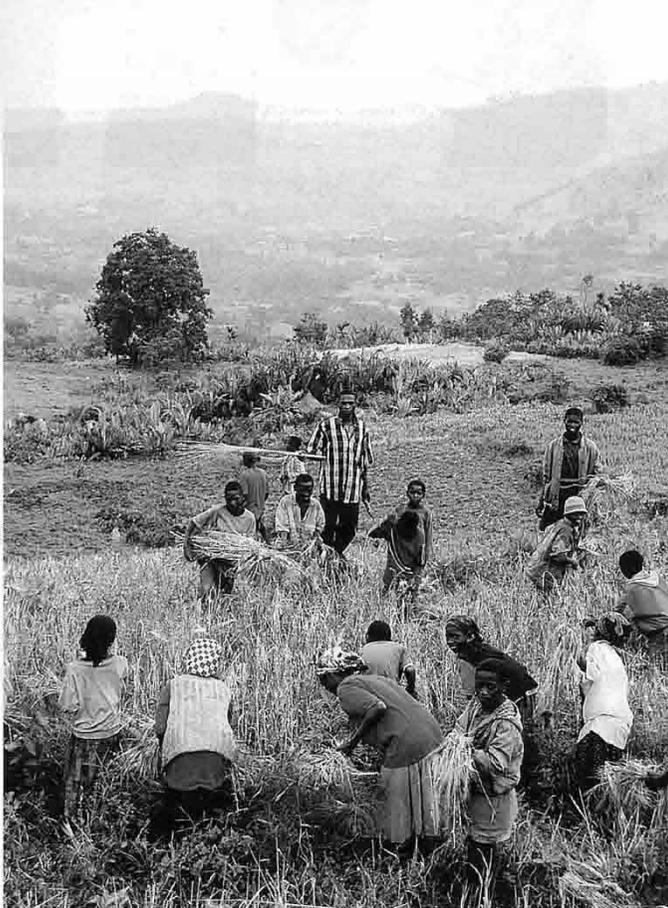
村の子どもたちには世帯の一員として、水くみや子守、薪ひろい、農作業、家畜の世話、定期市での商業活動の手伝いなど成長段階に応じた仕事が任される。7、8歳になると、子ども達はモラと呼ばれる組織に参加するようになる。モラは7、8歳から10代後半の男女を主な成員とし、年長のリーダーに率いられた20人から40人ほどの子ども達が各成員の親族の畑を順にまわりながら農繁期の農作業を集団で行なう共同労働組織である。モラは農繁期の初めに結成され、農繁期の終了とともに解散する。調査を行なった2003年の農繁期には23のモラ組織

を確認することができた。村の人々は、大人も子どもも、子どもがある程度成長したらモラに行くということを当然のこととして考えているという印象を受けた。また、モラで働いた体験は世代を超えてほとんどの村人に共有されている。

大人達は、自分の子どもをモラに参加させると自分の畑にモラの労働力を得ることが出来るため、子どもをモラに参加させる。各世帯からモラに参加する子どもは基本的には1人だが、作業量の多い日には各世帯から2人の参加が求められることもある。村人たちは子どもをモラに参加させる理由を「子どもがモラに行かなければ食料を得られなくて家族が死んでしまう」と説明する。すなわち大人達には、モラの労働力は安定した生産を維持するために必要なものとして捉えられている。一方、子ども達にとってモラは働きながら農作業の技術や知識を身につける場であると同時に、リーダー宅で他の成員と一緒に食事をしたり、作業の早さを競争したりする娯楽の場でもある。モラはまた、集団で働くことを通じて子ども達が将来大人になった時に求められる社会的規範を身につけるという在来教育の場でもある。モラでの農作業や世帯内での手伝いを通じて、子ども達は「仕事を知ること（woni esikan、woni = 労働・農作業・働く、esikan = 知る・理解すること）」を身につけて成長していくのである。モラが働く場であると同時に子どもが成長する教育の場でもあるということは、村の人々の「モラで育つ（molaa gapshikan、gapshikan = 成長、発展、育つこと）」という表現にも表われている。

学校教育の導入と就学者の特徴

調査地の子どもを取り巻く環境に近年おこった変化の一つとして、学校教育の導入を挙げることができる。この村に小学校が建設されたのは1979年で、現在でも唯一の公的教育の場となっている。2003年9月現在、この小学校には1年生から6年生までの579人が在籍している。小学校への就学者数は年々増加しており、小学校への就学経験を持つことはこの村でも一般的になりつつある（因みにドルドラを含む南部諸民族州南オモ県の2002年度の就学率は、県の教育行政担当者によれば、33.6%である）。公的に定められた就学開始年齢の7歳で小学校に入学する子どもは少なく、2003年9月に入学した生徒の平均年齢は10.5歳であった。また、高学年になるにつれて生徒数は減少し、1年生の在籍者が181人であったのに対し、6年生は18人であった。子ども達は主に経済的な理由で学校を辞めていく。その一方で、復学が容易にできるため、一度退学しても数年の後に復学する生徒も少なくない。



モラの作業風景（オオムギの収穫作業）

い。ドルドラの学校では、年齢制限を設けず、休学や復学に対して柔軟な対応をすることにより、生徒が各自の事情に合った方法で就学することが可能になっている。アリの社会では、子どもの就学を決めるのが父親であるのが一般的である。子どもが特定の年齢に達したかどうかということよりも、他の兄弟姉妹との関係や性別、そして世帯内の労働力がどれだけ確保できているかなどといったことを勘案しながら就学のタイミングが決められていることが多く、それが就学開始年齢と就学期間のばらつきとなって表われている。

ではなぜアリの人々は労働力を割いてまで子どもを学校に通わせるのだろうか。子どもを学校に通わせる親たちへのインタビューでは、「アムハラ語の読み書きが出来るようになって欲しくて」とか、「ものを知って（lei esikan, lei = もの・事柄）欲しくて」という理由から子どもを学校に通わせているのだという回答が多かった。「ものを知る」というフレーズは、学校教育が普及する前から使用されてきたが、以前は常識や人とのつきあい

方などの行動規範や決まり全般を指す言葉として用いられていたようである。反対に、「ものを知らない人間（moini）」は軽蔑の対象として非難される。また、アリ地域の中でも特にプロテスタント教徒の多いこの村では、アムハラ語は聖書を理解するための言語として重要視されている。しかし「高校まで行って役人になって欲しい」と答える親たちは希であった。彼らは、将来的に賃金労働に就くために学校に通わせるというよりも、学校に行くことによって得られる知識や経験のために子ども達を学校に通わせているという印象を受けた。これらのことから、彼らにとって学校に行くということは必ずしも規定の教育課程を終えることを前提とした行為ではないと考えられる。

共存するモラと学校

今から6年ほど前まではモラの作業時間と学校の授業時間が重複していたため、一人の子どもがモラにも学校にも行くということは不可能であった。しかし、授業時間の短縮をきっかけとして、モラのリーダー達はモラの作業時間を授業時間と重複しないように変

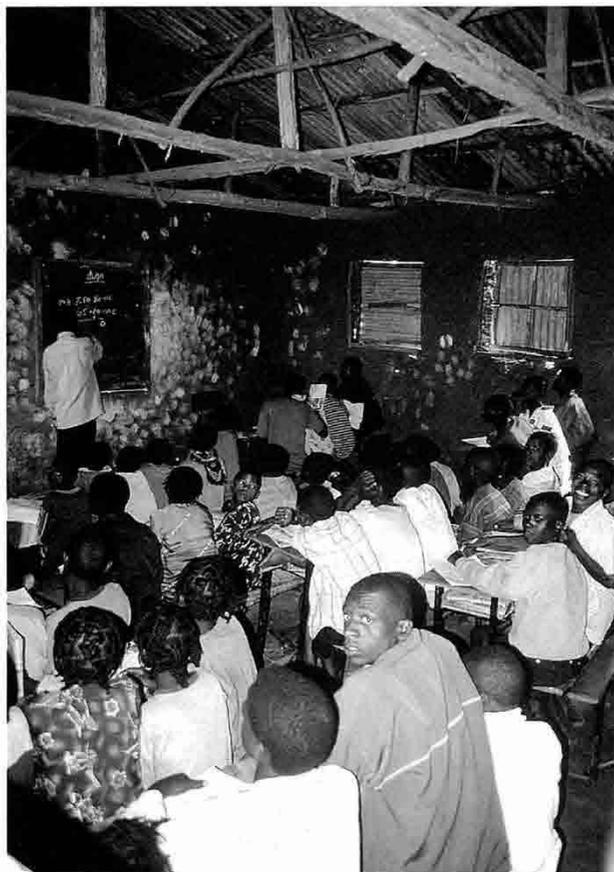
更し、学校に通う子どもがモラにも参加することが可能となった。調査時には授業前の早朝と放課後にモラの活動が行なわれており、小学校3年生に行なった調査では、約90%の生徒がモラへの参加経験を持ち、46%の生徒が現在もモラに参加していることがわかった。また、世帯のレベルでも子ども達に就学機会とモラへの参加が長幼の順に分配され、1人の子どもが何年間もモラに参加するのではなく、それぞれの子どもの時期をずらしながら学校にもモラにも参加する傾向が見られた。

学校教育が広く普及するまではモラが主な子どもの教育の場であったが、学校教育が比較的普及した現在でもモラの活動は維持されている。つまり、在来教育と労働の場としてのモラと公的教育の場としての学校を歩き来しながら、子ども達は成長しているのである。この共存は、アリの人々が学校に行って「ものを知ること」とモラに行って「仕事を知ること」の両方が子どもの教育にとって必要だと考えているからこそ可能になっているのではないだろうか。

おわりに

これまで発展途上国を対象とした教育学や開発研究では、より多くの子ども達を学校に就学させるための方策ばかりが論じられてきた。しかし、「どうして学校に行くのか」、という最も根本的な問いが地域の人々に投げかけられることなくこうした議論がなされてきたように思う。就学率の向上や効率的な学校運営のあり方ばかりでなく、地域や個人によって異なる教育ニーズを視野に入れた教育政策のあり方についても、議論されていくべきである。

アリの人々が「ものを知ること」と「仕事を知ること」という2つの教育目的をしっかりと持ち子どもを育てている姿や、子ども達が様々な仕事をこなしながら成長していく様子を見て、彼らのたくましさには私は感銘を受けた。そして同時に、アリの村で



小学校の授業風景

見聞きしたことを、子育てに悩む日本の親たちや、学校の成績ばかりで評価される日本の子ども達にも伝えていきたいと考えるようになった。

教育分野に限らず、同時代に暮らすアフリカの人々と共に様々な分野で協働していきたいと考え、アフリカ各地でフィールドワークを行なう仲間達とこの度NPOを設立した。フィールドワークをとおして学んだことを広く伝え、調査地の人々と日本人の人々を繋ぎたい、調査地の人々と一緒に考えて行動したいという想いを原動力に、研究と実践を結ぶ一つ的手段として活動していければと考えている。

(すずき いくの 京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科)